

カーネーションの計画的生産に関する研究

2. 整枝・長日処理と品種の開花特性

佐藤義機

この実験では前報にひきつづき香川県内で栽培されている29品種について、一次分枝の整枝数と長日処理が品種の分枝発生、開花時期、切花の品質および二次分枝発生におよぼす影響について調査した。

各品種は1974年10月15日に直接定植し、11月5日に地際から5節を残して一斉にピンチし、このあと異なった日長条件下で60日間栽培した。この間、摘芯後30日目に発生分枝数を調査し、分枝を無2本および3本と整枝した。調査は整枝数および長日処理と開花特性についておこなった。実験は1975年の5月31日までおこなった。

その結果、つぎのことが明らかとなった。

1. 一株当りの発生分枝数が多かった品種はレッド・ダイヤモンド(5.1本)、イエロー・スマイリング(5.0本)、豊田ローズ(4.8本)、久留米ピーター(4.7本)粧、千曲(4.6本)、オレンジ・スマイリング(4.5本)であった。逆に分枝発生が少なかった品種はフラミンゴ(3.5本)、ハーベスト・ムーン、P.S.N ピンク(3.6本)、ラデイ(3.7本)、アラスカ・ホワイト、オレンジ・ビューティ(3.8本)であった。

一方、長日処理区では各品種の分枝発生数は短日と同じような傾向であったが、一般に短日区よりも分枝の発生数は減少した。

2. 分枝の伸長は長日処理と枝数を制限することにより促進されることが明らかとなった。とくに、2本整枝で一次分枝の伸長が促進された。開花についても分枝の伸長が促進された。開花についても分枝の伸長と同様の傾向がみられ、長日処理と2本整枝で他の処理区にくらべ開花期は早まり、2本整枝ではいずれの日長についても全品種で100%の開花率が得られた。

3. 二次分枝の発生は短日条件下と2本整枝区でよく、他の処理区より0~3節低い節位から充実した長い分枝が発生することがわかった。

4. 生長初期における長日処理効果の有無で各品種を分類すると、長日処理効果の高い品種としてはスケニヤ3C、オレンジ・ビューティ、ハーベスト・ムーン、コーラル、イエロー・スマイリング、ラデイ、イエロー・ダスティ、インプルーブト・ホワイトの8品種があげられ、逆に長日処理効果が全くみられなかった品種にはイブニング・グロー、ロリータ、豊田ローズ、久留米ピーターの4品種があげられる。